１．本年度の酪農体験プログラム開発のねらいと特色

本研究のねらいは、幼稚園において牧場体験を含む領域横断的な酪農体験プログラムを開発し、園での保育及び牧場での酪農体験を通して、その実践のあり方を具体的に明らかにすることである。
今回の開発研究のねらいは、次のような３点である。

① 牧場体験を取り入れた幼稚園段階での領域横断的な酪農体験のモデル・プログラムの開発
② 幼稚園での実践を通したモデル・プログラムの検証
③ モデル・プログラムに基づく保育事例の収集・整理

このようなねらいのもとに、次のような５つの特徴をもつ酪農体験プログラムを開発する。

① いのちの大切さと食への感謝の気持ちを育てることをねらいとする
② 領域横断的なカリキュラム編成により、幼稚園における保育活動の５領域である、環境、言語、人間関係、健康、表現に関わる豊かな活動を組み入れる
③ ２回の牧場体験を実施し、その事前・事後活動を豊かに展開する
④ 園での酪農家とのふれあい交流会を組み入れる
⑤ 「親子料理教室」における牛乳を用いた調理実習を組み入れる

昨年度及び一昨年度に委託を受けた調査研究において設定した教育目標「いのちの大切さと食への感謝の気持ちを育てることをねらいとする」（上記の特徴①）と領域（教科）横断的なカリキュラム編成（上記の特徴②）、そして牧場への訪問回数（上記の特徴③）、さらに園（学校）での酪農家とのふれあい交流会（上記の特徴④）については、本年度の研究においても幼稚園児という発達特性を十分にふまえた上で継続するが、特徴⑤については、本年度において新たな特徴をもつ酪農教育プログラムを開発することをねらいとしている。
昨年度の研究においても、小学校５年生の実践事例においては家庭科の調理実習の一環として、「牛乳グラタンづくり」を組み入れたという点では、本年度の特徴⑤と同様の効果、つまり、子どもの調理体験が、酪農教育のねらいの達成につながることを想定しているが、本年度では、親子でともに牛乳（チーズ）を用いた調理体験を行うことを大切にし、牛乳の飲用習慣に関わる強いインフルエンサーである母親が幼稚園児である子どもたちにより高い教育効果を生み出すことを期待した。
このようにして、本年度の研究においては、幼稚園という、これまで酪農教育ではほとんど実践事例がなかった発達段階を対象としたこと、そして「親子料理教室」を組み入れて家庭と幼稚園が連携した教育活動を設定したことにより、新しい酪農教育プログラムの開発が可能になるように工夫した。

では、上記５つの特徴に、どのような教育的な意図や配慮が含まれているかについて概観する。

①　いのちの大切さと食への感謝の気持ちを育てることをねらいとする

今回開発する酪農体験プログラムは、幼稚園児を対象としていることがユニーク・ポイントであるが、牧場体験を組み入れている酪農教育を実施することと、一昨年度から実施している同様の委託研究との一貫性や共通性をもたせることを考慮して、本教育プログラムのねらいを「いのちの大切さと食への感謝の気持ちを育てること」という、これまでの教育プログラムと同じねらいにした。

幼稚園児という、４歳児（年中組）と５歳児（年長組）が、今回開発する酪農体験プログラムにそって実践される豊かな保育活動において、母牛や子牛に対して、「ありがとう」の感謝の気持ちをもったり、「いのちがなくなってかわいそうだからこそ、お肉や牛乳をしっかり食べよう」といった決心をしたり、あるいは、「牛さんや酪農家の人たちは、ぼくたち私たちのために、いっしょうけんめい働いてくれているんだな」といった命の大切さや働く人への感謝の気持ちが事前・事後活動での話し合いの過程で生まれるようにしたい。

②　領域横断的なカリキュラム編成により、幼稚園における保育活動の５領域である、環境、言語、人間関係、健康、表現に関わる豊かな活動を組み入れる

今回開発する酪農体験プログラムは、これまでに開発してきた教育プログラムと同様に、複数の教科（領域）を組み合わせた横断的なカリキュラムを採用している。幼稚園においては、小学校のような教科ではなく、環境、言語、人間関係、健康、表現といった保育活動の５領域に沿って教育活動が行われている。それぞれの領域は、小学校の教科と対応させるならば、環境（生活科、理科、社会科）、言語（国語科、外国語活動）、人間関係（特別活動、道徳）、健康（特別活動、家庭科、総合的な学習の時間）、そして表現（図工科、音楽科）となるであろう。

こうした複数の教科・領域をあるトピックやテーマ、体験活動等のコアのもとに相互に関連づけて教育活動を行うのは、次のような教育的な配慮に基づいている。

・低年齢の子どもは、気づきや関心が、大人が設定したカリキュラム領域を超えて連続していくことが多いため、子どもの学ぶ意欲を高めるためには、コアになるテーマやトピックの元に領域横断的な単元（教育プログラム）を実施する方がよい。

・教科や領域の中には、大きく分けて、対象の特徴に気づいたりそれらについて考えたりすることを中心的なねらいとしているものと、自分のアイデアや発想を絵や音、動き、ものとして表現することをねらいとしているものがある。例えば、前者は環境・人間関係・健康という領域であるし、後者は言語と表現であろう。したがって、必要に応じて、両者を共通のテーマやトピックの元に関連づけて扱い、子どもたちが気づいたり考えたりしたことを、しっかりと時間をかけて多様な方法で表現するようにうながすことで、学ぶ意欲が高まるとともに、気づきや考えと表現の相互作用により、それらの一層の深まりと広がりが生まれるようになるのである。

したがって、今回開発する酪農体験プログラムにおけるカリキュラム編成の特徴は、領域横断的な性格を持たせるようにした。例えば、「環境」では牧場での体験活動を、「言語」では事前・事後活動での話し合い活動を、「人間関係」では酪農家とのふれあい交流や友だちとの協力関係を、さらに、「健康」

では親子料理教室を、そして「表現」では図工展での牛の粘土細工をそれぞれあてることにした。

こうした多様な活動を、牛や牛乳という共通テーマの元に、子どもたちがいきいきと自ら進んで取り組めるような活動配列や教育方法の工夫を取り入れた、幼稚園児のための酪農体験プログラムを開発したい。

③　２回の牧場体験を実施し、その事前・事後活動を豊かに展開する

これまでの２年間にわたる小学校での酪農体験プログラムの開発においても、経費的な課題はあるが、子どもたちの体験の豊かさを保障するために、２回の牧場訪問を組み入れることを実践の特徴にしてきた。その理由は、１回の牧場訪問では、バスの乗車時間を除けば牧場での滞在時間が２時間程度しか確保できないため、２回の訪問によって多様な活動（餌やり、哺乳、搾乳、堆肥作り、掃除、バター作り、ブラッシング、スケッチ等）を子どもたちに体験させることができるようになるからである。

ただし、今年度の実践研究では、幼稚園児が対象となるため、こうした活動内容の多様性の保障だけでなく、「１回目でできなかったことが、２回目の体験でできるようになったよ！」という活動の成功体験を得させたり、活動の達成感を味わわせたいと考えた。具体的には例えば、幼稚園児においては、特に搾乳体験について怖がったり不安がったりする子どもがいるのではないか、そして、ブラッシング体験について柵にのぼれなくてできない子どもがいるだろうと予見した。

そのため、２回にわたる牧場体験がそうした子どもの不安感をなくし、また、繰り返し体験による慣れが子どもの自信を高めることにつながることを期待した。

ただし、ほとんどの酪農教育ファームでは、幼稚園児を園単位で迎えているところはないために、今回の実践研究は、あくまでも試行的・試験的な取り組みであるといえる。また、衛生上の安全性の担保も幼稚園児においては難しいため、今後、幼稚園での酪農体験プログラムが安全に安心して行えるようになるには、もう少し慎重な判断と実施基準の策定が望まれる。

さらに、これまでのプログラム開発と同様にして、牧場体験を単発的に行うのではなく、いわゆる事前・事後活動（小学校においては、事前・事後学習と呼ぶ）を豊かに行い、牧場体験の教育効果をより高められるように工夫する。

具体的には、事前活動においては、牧場体験の内容を紹介して（特に搾乳体験）期待感を高めたり、２回目の牧場体験についての意欲を高めたりするために、紙芝居を読み聞かせしたり、牧場の写真を見せたり、やってみたいことを発表させたりする機会を設定するとよいだろう。また、事後活動においては、体験の振り返りの話し合いをしながら、達成感を味わわせるために「できるようになったこと」を発表させたり、「たのしかったこと」を発表させるとよいだろう。また、ねらいと直截的に関わる部分としては、酪農家のお話をもとにして、「母牛や子牛のいのちの大切さ」や「牛乳やお肉を感謝して食べたり飲んだりすることの大切さ」について感じたことや気づいたことを発表させるとよい。

また、子どもたちの感覚を研ぎ澄ますために、見たこと、触ったこと、においをかいだことなどについて、具体例を入れながらお話しさせてもよいだろう。搾乳体験のときに感じた母乳の温かさや、牧場で作っているアイスクリームのおいしさ、牛乳からバターができる不思議さ等について、子どもの新鮮な感性を大切にしたい。

幼稚園児は、まだほとんど文字が書けないため、お話し発表会といった形式で園児を半円形に座らせ

て、こうした気づきや思いをたっぷりと出し合わせたい。そうすることで、この酪農体験プログラムのねらいがより一層達成されることが期待される。

④　園での酪農家とのふれあい交流会を組み入れる

牧場での酪農家とのふれあいは、小学生だけでなく幼稚園児にとっても、大きな教育効果をもつものである。牛や牛乳の特徴について教えてくれたり、いのちや食べものの大切さを教えてくれたり、様々な体験のコツを教えてくれたりする、優れた教師になるからである。

しかし、牧場での酪農家とのふれあい交流は時間的な制限があるために、可能であれば学校や園にお呼びしてふれあい交流会を設定し、質問をしたり、お礼を述べたりして、酪農家に学ぶ機会を増やすことができればなおよいだろう。

⑤　「親子料理教室」における牛乳を用いた調理実習を組み入れる

子どもたちに、牛乳の大切さを健康面（栄養素）といのちの側面から体験的に気づかせるために、学校栄養士をゲストティーチャーとして招いて、親子料理教室を設定することにした。幼稚園児が、いのちや食べものの大切さに気づいたり考えたりする場は、実際には家庭であり、そこでの主なインフルエンサーは母親であろう。子どもたちが、牛や牛乳をめぐるいのちと食の大切さに気づいたり、それに基づいて感謝の気持ちを込めて食事をしたりするためには、母親自身が牛乳を使った調理をして子どもと命や食の大切さを語り合ったり、あるいは牧場体験を子どもとともに行うことで命と食の大切さに気づいたりすることが大切である。

つまり、母親（もちろん父親や祖父母であることもあるだろう）自身が、牛や牛乳、つまりは広い意味での酪農の特徴や現実に触れて、実感のある豊かな学びを得ることが必要である。

その意味では、特徴の③との関わりでも同様のことが工夫されている。今年度の酪農体験プログラムでは、はじめて保護者（実際には全員が母親であった）が牧場体験に参加することができた。子どもと同じ体験メニューを行ったり、酪農家から保護者向けの詳しい解説を聞くことができた。そうした子どもたちとの共通体験が、家庭での牛乳や牛、そして酪農家をめぐる話し合いにつながることや、積極的な牛乳の飲用習慣と調理活動につながることを期待した。

２．幼稚園児を対象とした酪農教育カリキュラムの開発

本年度開発した幼稚園での酪農体験プログラムにおいては、領域横断的な酪農教育カリキュラムを開発して、それにそった実践を行った。

前節で規定した５つのプログラムの特徴を踏まえて、表１のようなカリキュラム・プランを構成した。（表１）

この表の右側にある「関連領域」とは、幼稚園の保育に関わる５領域のどれに、それぞれの保育活動や子どもの体験活動があてはまるかを示している。

では、この酪農教育カリキュラムの特徴を見てみよう。

今回開発した酪農教育カリキュラムは、牧場での体験時間を含め、およそ全１６時間で取り組む計画にした。また、事前・事後活動を必ず位置付けるとともに、発展的な活動として、「図工展」と「親子料理教室」を設定したため、大きく８つの活動セクションからなるカリキュラム・プランとなっている。以下にその流れを示す。

◎　活動①　【事前活動】　第１回目の牧場体験への誘いかけ（0.5 時間）

（ねらい）牧場へ行く楽しさをかきたて、牧場のイメージを持たせる。
（内容）牛乳はどこから来るの？　牧場は、どんなところ？
（活動）椅子に座って半円形になり、気づきや知っていることを話し合う。
（留意点）牛に会える喜びを、わきたたせる。事前に牛の絵を描かせておく。

◎　活動②　【第１回牧場体験】　埼玉県榎本牧場訪問（4 時間）

（ねらい）牧場での酪農体験を通して、命や食べ物の大切さに気づく。
（内容）牛乳はどうしたら出るようになるの？　どんなお世話があるかな？
（活動）搾乳体験１回目、餌やり体験、アイスクリームの試食
（留意点）牛を驚かせないようにする。手をしっかりと洗う。

◎　活動③　【事後活動】　体験をして気づいたことの話し合い（1 時間）

（ねらい）酪農体験で気づいたことを出し合い、命と食べ物の大切さに気づく。
（内容）男の子牛はどうなるの？　母牛は牛乳が出なくなったらどうなるの？
（活動）椅子に座って半円形になり、気づきや考えたことを話し合う。
（留意点）活動の様子の写真を貼っておく。できれば、わけをいわせる。

◎　活動④　【事前活動】　第２回目の牧場体験のめあての確認と動機づけ（0.5 時間）

（ねらい）２回目の牧場体験に行くわけを考え、期待をふくらませる。

（内容）子牛はどうしているかな？　もっとじょうずにお世話をしたいな。

（活動）椅子に座って半円形になり、気づきや考えたことを話し合う。

（留意点）活動の様子の写真を貼っておく。紙芝居や絵本を活用する。

◎　活動⑤　【第２回牧場体験】　埼玉県榎本牧場訪問（4 時間）

（ねらい）牧場での酪農体験を通して、より深く命や食べ物の大切さに気づく。

（内容）子牛はどうしているかな？　もっとじょうずにお世話をしたいな。

（活動）搾乳体験２回目、ブラッシング、哺乳体験

（留意点）酪農家のお話をしっかりと聞かせる。達成感を味わわせる。

◎　活動⑥　【事後活動】　体験をして気づいたことの話し合い（1 時間）

（ねらい）酪農体験で気づいたことを出し合い、命と食べ物の大切さに気づく。

（内容）人間は牛乳を牛からもらっている。できるようになってうれしい。

（活動）椅子に座って半円形になり、気づきや成果を話し合う。

（留意点）活動の様子の写真を貼っておく。紙芝居や絵本を活用する。

◎　活動⑦　【図工展】　牛の粘土細工と牛の模型づくり、榎本さんとの交流（3 時間）

（ねらい）命の大切さ、牛や酪農家への感謝をもちながら、造形表現に生かす。

（内容）酪農体験や牛の体の特徴、牧場の様子を思い出そう。

（活動）粘土細工や模型づくりに取り組む。酪農家と交流する。

（留意点）思いを込めて表現に取り組ませる。酪農家にお礼を述べる。

◎　活動⑧　【親子調理実習】　チーズピザづくり（2 時間）

（ねらい）牛乳が体によいことを知り、牛乳を使った料理を協力して作る。

（内容）チーズピザを作ろう。講師の先生のお話を聞こう。

（活動）お家の人や友だちと協力して、手作りチーズピザを作って食べる。

（留意点）温度や包丁の扱いに気をつける。衛生に配慮する。

　このような大きく８つの活動を連続的に関連して行うことで、いのちと食の大切さを考えさせる酪農教育のねらいを達成できると考えた。

　では次に、この酪農教育カリキュラムの実施と検証を依頼した、新宿区立鶴巻幼稚園での具体的な実践の様子を見てみよう。

表１　幼稚園における酪農教育カリキュラム案（新宿区立鶴巻幼稚園　全 16 時間）

月	時間	活動内容	関連領域				
			健	人	環	言	表
11	0.5	**【事前活動】　第１回目の牧場体験への誘いかけ** （ねらい）牧場へ行く楽しさをかきたて、牧場のイメージを持たせる。 （内容）牛乳はどこから来るの？　牧場は、どんなところ？ （活動）椅子に座って半円形になり、気づきや知っていることを話し合う。 （留意点）牛に会える喜びを、わきたたせる。事前に牛の絵を描かせておく。				○	
11	4	**【第１回牧場体験】　埼玉県榎本牧場訪問** （ねらい）牧場での酪農体験を通して、命や食べ物の大切さに気づく。 （内容）牛乳はどうしたら出るようになるの？　どんなお世話があるかな？ （活動）搾乳体験１回目、餌やり体験、アイスクリームの試食 （留意点）牛を驚かせないようにする。手をしっかりと洗う。		○	○		
11	1	**【事後活動】　体験をして気づいたことの話し合い** (ねらい)酪農体験で気づいたことを出し合い、命と食べ物の大切さに気づく。 (内容) 男の子牛はどうなるの？　母牛は牛乳が出なくなったらどうなるの？ （活動）椅子に座って半円形になり、気づきや考えたことを話し合う。 （留意点）活動の様子の写真を貼っておく。できれば、わけをいわせる。				○	
12	0.5	**【事前活動】　第２回目の牧場体験のめあての確認と動機づけ** （ねらい）２回目の牧場体験に行くわけを考え、期待をふくらませる。 （内容）子牛はどうしているかな？　もっとじょうずにお世話をしたいな。 （活動）椅子に座って半円形になり、気づきや考えたことを話し合う。 （留意点）活動の様子の写真を貼っておく。紙芝居や絵本を活用する。				○	
12	4	**【第２回牧場体験】　埼玉県榎本牧場訪問** (ねらい)牧場での酪農体験を通して、より深く命や食べ物の大切さに気づく。 （内容）子牛はどうしているかな？　もっとじょうずにお世話をしたいな。 （活動）搾乳体験２回目、ブラッシング、哺乳体験 （留意点）酪農家のお話をしっかりと聞かせる。達成感を味わわせる。		○	○		
12	1	**【事後活動】　体験をして気づいたことの話し合い** (ねらい)酪農体験で気づいたことを出し合い、命と食べ物の大切さに気づく。 （内容）人間は牛乳を牛からもらっている。できるようになってうれしい。 （活動）椅子に座って半円形になり、気づきや成果を話し合う。 （留意点）活動の様子の写真を貼っておく。紙芝居や絵本を活用する。				○	
1	3	**【図工展】　牛の粘土細工と牛の模型づくり、榎本さんとの交流** (ねらい) 命の大切さ、牛や酪農家への感謝をもちながら、造形表現に生かす。 （内容）酪農体験や牛の体の特徴、牧場の様子を思い出そう。 （活動）粘土細工や模型づくりに取り組む。酪農家と交流する。 （留意点）思いを込めて表現に取り組ませる。酪農家にお礼を述べる。		○			○
2	2	**【親子調理実習】　チーズピザづくり** （ねらい）牛乳が体によいことを知り、牛乳を使った料理を協力して作る。 （内容）チーズピザを作ろう。講師の先生のお話を聞こう。 （活動）お家の人や友だちと協力して、手作りチーズピザを作って食べる。 （留意点）温度や包丁の扱いに気をつける。衛生に配慮する。	○	○			

※　健：健康、人：人間関係、環：環境、言：言葉、表：表現

【活動の様子（活動⑥、⑦、⑧のみ抜粋。その他の実践の様子は、３節及び４節を参照）

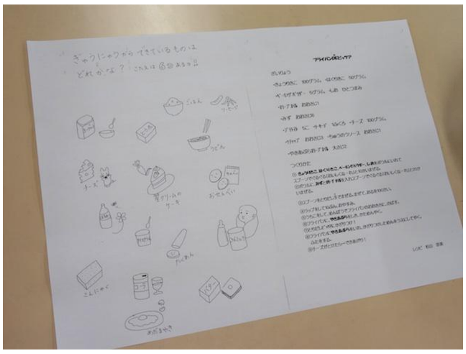
活動⑥　第２回目の事後活動

うさぎ組の話し合いの様子	きりん組の話し合いの様子

活動⑦　図工展

牛の大型模型	牧場の再現模型
牛の粘土細工	酪農家の榎本さんとの交流

活動⑧　親子料理教室

	
学校栄養士による模範演示	牛乳の栄養価の説明プリント
生地づくり	生地をのばして成形
包丁を使った具材づくり	盛りつけ
フライパンで焼く	完成！